

# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第17号

(2013年10月)



北光クラブ  
自然観察クラブ

牧野富太郎著『随筆草木志』(昭和11年7月25日・南光社発行)

昨年生誕150年を迎えた日本の植物学の父、牧野富太郎先生に再登場してもらいました。

山草の採集

白馬岳のお花畑

私も大方方々の高山に登ったが日光は女峰や男体山は何れかと云うと、外輪的で比較的高山植物も少ないが白根山は多い。ハヶ岳は登るに都合の良い高山でハヶ岳むぐら、ハヶ岳しのぶなどは日本では此山のみに限る高山植物である。ひげはりすげ等も観賞には適せぬが植物学上珍しいもので是も此山に限られて居る。高山植物に就ての知識を得ようと思えば信州の白馬岳に登るがよい。東京から行くとすれば上野駅から長野行の汽車に乗って篠井駅に出で此処から松本行の汽車に乗替え明科駅に降りる。途中で名所もあるが兎に角此駅で下車してから北へ6里馬車で行くが大町に着く。此処から越後の糸魚川に通ずる道路を馬車で行く事6里にして北城の宿に着く。此北城村は白馬岳の麓で案内者を雇うて行けば直ぐ登れる。山の中腹を白馬尻と云って雪が多い。其雪の消えている処から絶頂迄は雪がなくて所謂お花畑に成っている。雪の消えている近所には芽が出ているが其れが段々と進むに従って花を開き実を結ぶと云う有様である。其百花繚乱のお花畑をねぶか平と云っているが、崇高清美の感慨は到底筆にも舌にも言い尽せない。又絶頂に登って瞰下すると山の溪谷には皆雪があつて越中、越後は一望の下で富山市も見える。夜などは螢の光に似たうすぼんやりした光が見えるのは富山市の電燈だが彼様な高嶺に登って之れを眺めると物質以外の全く俗を洗った雅景に見える。尚お立山の雪白の衣装を纏うた姿が見えるので真夏の感じは起らぬ。帰りは雪の上を滑って下りるが、是れが又愉快なもので東京の人は是れのみでも出かける価値はある。

登山の準備と注意

(次ページへ続く)

登山の心得として私の経験は軽装に限る。頭に雫が入るから鳥打帽は不可い。蓑は絶頂に登っても途中で休むにも腰掛に敷かれるから好都合、雨にも結構、丈夫な洋傘もよい。弁当は缶詰物よりも握飯に梅干がよく、味噌汁は山では至極よい。

### 其の他二三の事

日本の高山植物界に取りて忘るる事の出来ないのは城数馬・木下友三郎の両氏、松平康民・加藤泰秋・久留島簡・青木信行等の各子爵、小川正直氏、長野県松本の女子師範学校長矢沢米三郎氏・志村烏嶺氏・前田曙山氏、今は故人となった五百城文哉氏等の諸氏が盛に高山植物の採集を成し、又培養に従事せられた事である。

諸氏は娯楽として全く閑却されていた高山植物の採集に努力したために学者側に在っては大に研究の歩を進める事が出来た。其時代虫取すみれなどは珍らしかった位であるが、其後採集の材料は漸く豊富になって、私共は之れに一々名称を附けたり種類を定めたり、随分研究すべき仕事が多くなった訳で遂には自分も高山に登る様になった。

斯くて一時は非常の盛況を呈するに至ったが又斯うなると一利一害で、植木屋連の乱採が始まり植物保護の取締規則が出来、今日でもハヶ岳や白馬に行くには小林区署の許可を得なければならぬと云う面倒を見る様になり、自然高山植物採集熱も一時下火しかったが、又此頃少しく頭を擡げて来たようである。

高山植物の知識を広める為には、東京の様な都会には公園の中に「高山植物園」を造るがよからうと思う。外国の様に上方に高く岩を組む様にせず、地下に掘って岩石を置けば空気の乾燥も少く、場所も取らず、至極結構だらうと思う。且つこれは高山植物を専門に研究している人に依頼すれば面白からうと思う。

オニバスの幼株を首に掛けて嬉しそう  
(昭和 14 年、77 歳)



※ 文中の表記は読みやすさを考慮して勝手ながら適宜直しています。

自ら「植物の精」と称した牧野富太郎は、その94年の生涯に於いて、1500種類以上の植物の新種や新品種を発見し命名も行った、日本の近代植物分類学の権威とされ、その研究成果は50万点もの標本や観察記録、そして『牧野日本植物図鑑』に代表される多数の著作として残っています。その人となりを中心にまとめてみました。ここにも私財をなげうって近代化に貢献した明治の日本人の姿が浮かび上がって来るようです。

### 人物紹介・牧野富太郎

1862年（文久2年）4月24日、土佐国高岡郡佐川（さかわ）村（現在は町）に生まれる。佐川は古くから「佐川山分学者あり」と言われた文教の町で、領主深尾家の建てた郷校「名教館（めいこうかん）」もあり多くの人材を輩出した土地柄。水質がよく、酒屋の多い土地で、生家「岸屋」も酒造と雑貨店（現地では小間物屋という）で裕福な商家、町内では上流階級だった。父佐平、母（家付き娘）久寿の唯一の子で、幼名成太郎（せいたろう）。しかし3歳で父、5歳で母と死別、6歳で祖父も亡くなり、代わって一家の采配を振る祖母に大切に育てられる。土佐の豊かな自然に生まれ、幼少から植物に興味を持つ。西洋人めいた風貌と、痩せて手足が細長いので、「ハタットウ」（土佐弁でバツタのこと）と友人からからかわれていたという。

10歳の頃から、寺子屋で習字、私塾で士族の子弟に交じって算術・四書五経、前述の名教館（武士の学校ながら維新の混乱が幸いして入ることができたらしい）で西洋の最先端の学問（物理・地理・天文など）、その他英語学校などで学ぶ。12歳で学制によりできた小学校に入学、文部省の博物掛図に触れ大いに刺激を受けたりもしたが、授業に飽き足らず（？）2年で自主退学、一人で読書や好きな植物採集に日を過ごし、15歳の時、授業生（臨時教員）として月3円の給料で小学校の教壇に立つ。この頃、昆虫採集も。2年ほどで辞め、漢文を主に教える高知の私塾にしばらくいたのを最後に、以後学歴は「小学校中退」のまま、植物学を始め学問はすべて独学という。この頃の交友関係も手伝って数多くの和洋の書籍に触れ、欧米の植物学の影響を受けた。

1881（明治14）年、19歳の時、お供を2名連れ、書籍や顕微鏡を求めて初めて東京。当時の交通事情（東海道本線全通はこの8年後）により、神戸までは海路、汽車で京都へ、そこから徒歩で四日市へ、さらに汽船（外輪船）で横浜へ、そして汽車で東京へ。東京では神田猿樂町に下宿し、朝、窓から見える富士山に感動したという。開催中の第2回内国勧業博覧会を見物、博物館・植物園・植木屋などを巡り、買い物をし、

日光・中禅寺湖まで足を延ばす（この時は陸路、徒歩や人力車で日光街道を北上し宇都宮 1 泊で行ったが、3 年後には東京・両国から栃木・新波―藤岡町―まで蒸気船の便を利用。その後も日光には度々植物採集に足を運ぶ）。佐川への帰路は横浜まで汽車、東海道を徒歩や、人力車・乗合馬車など乗り継ぎ、途上、箱根や伊吹山にも寄った。

3 年後、2 度目の上京の時、帝国大学理科大学植物学教室（俗に「青長屋」と呼ばれていた）へ出入りするようになり、植物分類学の研究に打ち込む機会を得る。入学はせず、ただ本や標本を見せてもらうのだが、面白がられて厚遇されたという。

以後、郷里佐川との間をほぼ 1 年おきに往復しながら、採集・写生と研究に没頭する。帰郷中には植物採集、標本作製、植物画制作などの他、郷里で科学の演説会を開催、後に「理学会」を設け科学の啓蒙を図ったり（元々佐川には化石を産出するなどして科学に親しむ風があったという）、土地柄、自由民権運動にかかわったり、西洋音楽会を開いて音楽指導にまで奔走する（私費で高価なオルガンを購入し寄付したともいう）。このように坊ちゃん育ちで「前後も考えないで鷹揚に財産を使いすて」た結果、1891（明治 24）年の帰郷で、実家の家財を整理することになる。

ところで草創期の日本の植物学者は、未知種や新種と思われる植物を採集すると真っ先にロシアの植物学者カール・ヨハン・マキシモビッチの元へ標本を送り、その種同定を依頼していた。彼は、ケンペル、ツンベルク、シーボルトと続いた日本の植物相調査研究の流れを引き継ぎ、これを日本人植物学者に引き渡す重要な役割を果たした人。開国直後に来日、4 年間にわたり滞在して、精力的に日本の植物相調査を行った。豊かな知識と現地調査の経験を生かして日本人研究者に適切な助言と指導を行い、日本の植物学のレベルは著しく向上する。

牧野が同氏に標本を送り始めたのは 1886（明治 19）年頃。数年間に数千本の標本を送り、新種も 80 種類近く含まれていたという。翌年、マルバマンネングサが初めて新種と認められ、学名にマキシモビッチと自分の名が入ったのに大いに自信をつける。同年、共同で研究誌「植物学雑誌」創刊（現在も刊行されている）。その翌年にはかねてから構想していた『日本植物志図篇』の刊行を始める（今で言う植



マルバマンネングサ



ヤマトグサ



大正 2 年、来日したドイツの植物分類学者  
エングラールと共に日光で植物採集  
牧野は後ろ右から 2 人目（当時 51 歳）  
右端は白井光太郎（著名な植物病理学者）

物図鑑のはしり)。1889 年にはヤマトグサに初めて自分で学名を付け、学会を驚かせた。(植物図鑑の学名末尾には“Maxim.”(マキシモビッチ)、“Makino”(牧野)がよく見られる。発見=命名者というわけである。)

日本の植物がまだあまり解明されていなかった時代に全国に赴き、未知の植物に学名をつけ、特徴を学術的に記述・記録するという作業のために、おびただしい数の標本や文献、また精緻な植物図が資料として

必要だった。さらにはその発表の場としての出版物にも私費を投じる。輝かしい業績を挙げ、研究者の地位を確立していく一方で、家産を使い果たすことになった。

1890 (明治 23) 年、小澤寿衛 (すえ、寿衛子とも) と結婚。没落した旧彦根藩士の娘で、帝大理科大学へ通う途上にその営む菓子屋があって見初めたのだ。植物本の印刷技術習得のため弟子入りしていた神田錦町の石版印刷屋を仲人に頼み、東京根岸に所帯を持った (26 歳、新婦 17 歳)。後々、「まるで道楽息子を一人抱えているようだ」と冗談に言いつつ、一時は「待合」を経営するなどして一家の経済的苦難を陰で支えながら、明るく尽くす妻だったという。

1893 (明治 26) 年、帝国大学理科大学助手となり (31 歳)、1912 (明治 45) 年には同講師 (50 歳)、1939 (昭和 14) 年、77 歳で辞職するまで、長らく東大に奉職。その間、教師から学生まで幅広く交流し人脈も築く。一時、研究室との確執で冷遇されるなどの困難もあったが。

研究室の薄給に加え浪費癖のため、年譜にも度々見えるように「経済困窮」は長らくついて回った。すでに頼みの生家は没落している。増え続ける植物標本や膨大な専門書に加えて大家族 (子供が 13 人、成人したのは 6 人) のため、薄給に不釣り合いな大きい家に住み、家賃を払えず追い出され (転居 18 回と)、家族の費えのためまた借金、と悪循環に陥る。膨大な借金のため、執達吏に研究室の標品、家財道具まで蹂躪されることもあったという。が、その都度救いの手が差し伸べられる。同郷の友の奔走で三菱本家岩崎氏に助けられたり (1896 年)、やはり同郷者の助力で大学から仕事を託され

たり(1902年)、海外流出寸前の標品30万点を引き取って支援してもらったり(1916年、若き日の池長孟により池長植物研究所となる。彼は南蛮美術の収集でも知られる)。

明治末から昭和前期、野山に出かけて植物を採集し、植物知識の向上を目指して日本各地に「植物同好会」が誕生したが、牧野は講師として招かれ、参加者と共に新種を含む数多くの植物を採集する。土佐人らしい陽気で気さくな語りで人々を魅了して全国にファンを作り、植物を知ることの大切さを一般に広く伝えた(本誌第5号参照)。1911(明治44)年には、東京植物同好会を創立、会長となる(49歳)。年齢、性別、職業の違いによらず、自由な雰囲気の中、毎月1回の日曜日、一緒に植物採集に励み、植物の名を覚え植物に親しんだという。(1955(昭和30)年以後、牧野植物同好会)

また筆まめな人で、植物に関する内容なら、一線の研究者から見知らぬ人、子どもからの手紙にも返事を出した。人とのつながりを大切にしたのは、標本の提供を期待する



東京植物同好会、登戸(のぼりと)採集での一コマ

1941(昭和16)年7月6日、牧野富太郎79歳

この後日本がたどった戦時下の窮乏を思うと、

戦争による時代の逆行の凄まじさを思わずにはおられない。

当時としてもかなりの高齢の牧野センセイの元気さもあることながら、それを囲む人々の朗らかな表情、しかも女性や子どもの多いこと!



意味もあつたらしいが、結果的に植物学の裾野を広げることになり、幼時から富太郎の指導を受けて、植物の大家になった研究者も少なくない。

1924（大正 12）年の関東大震災の時は渋谷の住居にいて、いろいろと観察しながら揺れを楽しんでいたという（61 歳）。しかし貴重な刊行物を焼失し、それがきっかけで 2 年後郊外の大泉に転居、これが終の棲家となる。ここに植物園を設ける構想を夫妻で持ったが、それが実現するのは牧野没後のことになる。

1927（昭和 2）年、勧められて学位論文を提出し、理学博士に。民間に在って大学教授並みの仕事をしたかったのに、大学にいて学位を「押付けられ」、すっかり平凡になってしまったと嘆く。（65 歳）



1928（昭和 3）年、妻寿衛死去（享年 54 歳、子宮がんだったようだ）。新種の笹を「スエコザサ」と名付け、妻の名の学名をつける（66 歳）。

スエコザサ

東大講師辞任後も著書の刊行をますます盛んに行い、1940（昭和 15）年、『牧野日本植物図鑑』を刊行（78 歳）（本誌第 11 号参照）。

植物の普及活動は皇室にも及び、昭和天皇の標本を最初に鑑定、1948（昭和 23）年には、皇居に参内し昭和天皇に植物学御進講（86 歳）。1950（昭和 25）年、日本学士院会員（88 歳）。1951（昭和 26）年、第 1 回文化功労者（89 歳）。1953（昭和 28）年、東京都名誉都民（91 歳）。

1957（昭和 32）年 1 月 18 日、94 歳で永眠。没後文化勲章。

参考文献：『牧野富太郎自叙伝』（昭和 31 年 12 月 20 日発行・長嶋書房）

高知県立牧野植物園刊『牧野富太郎写真集』（平成 11 年 11 月 1 日）

その他多数

※ 歴史家による本格的な牧野富太郎の伝記はまだないとのことです。昨年生誕 150 年を迎え、出身地高知の読売新聞・地方版には植物園に残された膨大な書簡からその生涯をたどる企画記事が連載されています。この言わば「巨人」については、まだまだ研究途上ということです。

それを「簡単に」紹介しようなど、とんでもなく大それたことだったと、楽しくも苦しい作業の拳句、その未熟な成果物を前に、今更ながらに思っています。（編集人）



## 牧野富太郎著書目録（随筆、図鑑、検索表、植物目録を除く）

随筆は月報10号に、図鑑・検索表・植物目録は月報第11号に掲載済みです。

	日本植物調査報知（2冊）	敬業社
	繇条書屋植物雑識	敬業社
	植物学講義（7冊）	中興館
	植物記載学	中興館
	植物乾腊標本並びに整理貯蔵法	中興館
	日本の竹類	島津製作所
	植物採集及び標本調製法	岩波書店
明治20年	植物学雑誌（創刊）	
明治34～大正2年	日本植物考察	
大正3年	日本植物乾腊標本目録（根本と共著）	
大正5年	植物研究雑誌（創刊）	
大正8年	雑草の研究と其利用（入江と共著）	白水社
昭和4年	鳥物語・花物語（花物語を担当）	興文社・文藝春秋社
昭和5年	花鳥写真図鑑（全6巻）（岡本東洋撮影、牧野他解説）	
昭和7年	植物学講話（和田と共著）	南光社
昭和7年	ハナショウブの話	文友堂
昭和7年	秋の七草の話	文友堂
昭和9～11年	牧野植物学全集（全7冊）	誠文堂
昭和10年	植物学名辞典（清水と共著）	春陽堂
昭和10年	趣味の植物採集	三省堂
昭和12年	菊の話	文友堂
昭和21～27年	牧野植物混混録 第1～13号	鎌倉書房
昭和24年	植物知識	通信教育振興会
昭和56年	//（学術文庫）	講談社
昭和31年	牧野富太郎自叙伝	長嶋書房
平成16年	//（学術文庫）	講談社

那須・茶臼岳ハイキング 転じて沼原湿原  
9月22日(日) 天気・晴れのちくもり

台風のため、予定の1週間後に変更して実施しました。

ロープウェイを利用して、深田百名山の一つ、那須岳(茶臼岳)に登ろうと、北小朝6時集合で出発し、東北道を使って車を走らせたのですが、山麓駅に到着した時、駐車場はすでに上から下まで満車。速やかに計画を変更して沼原(ぬまっばら)湿原へ向け出発しました。

途中、芭蕉が「奥の細道」の旅で訪れた温泉(ゆぜん)神社に参詣。ミズナラの巨木や大きなゴヨウマツ(ヒメコマツ?)が見られました。殺生石には芭蕉の句碑「石の香やなつ草あかく露あつし」がありました。

道に迷いながらたどり着いた沼原湿原駐車場もほぼ満車でしたが、何とか車を置き、まずは昼ご飯を食べてハイキングに出発。池塘(ちとう)にはクロサンショウウオは見られなかったものの、オタマジャクシや、水面を飛び交うルリボシヤンマが見られました。ズミやマユミの赤い実、サワフタギの青い実、そしてナンタイブシやサワギキョウの青い花、アケボノソウやノコギリソウ、テンニンソウの白い花がきれいでした。山口龍治氏からはヤママユガ(蛾)、ハナイグチ(茸)など教えていただきました。



沼原湿原にて

※ 参加者(敬称略)

石川くるみ・光樹・晴樹・さやか・塩入宏行、小川知峻・裕月・真司・恵美、平井亜湖、小島美穂、山口龍治、石崎隆史・裕子、阿部良司(計15名)

※ 開花していた植物

アキノキリンソウ、ノコギリク、テンニンソウ、オヤマリンドウ、ナンタイブシ、サワギキョウ(右図)、アケボノソウ



※ 見た(注目すべき)樹木

オオカメノキ、クマシデ、コハウチワカエデ、シナノキ、

ミネザクラ、マユミ (実)、エンジュ、サウフタギ (実)、  
 カンボク、ヤマネコヤナギ、アサノハカエデ、  
 カジカエデ、ズミ (実)



道中のコンビニ壁面で見つけた  
 ヤママユガ (開帳約 15 cm !)

※ 見た鳥、聞いた鳥

カケス

※ 目撃した昆虫

クヌギシギゾウムシ (殺生石)、ルリボシヤンマ (湿原)

※ 那須の思い出写真館



温泉神社の  
 ミズナラの巨木



芭蕉ゆかりの温泉神社の前で



殺生石のあたり  
 毒ガス注意の表示あり



殺生が原を  
 神社裏から見下ろす



石がごろごろ、よく見ると  
 みんなお地藏さん！



ナンタイブシ



アケボノソウ



ハナイグチ  
 裏側は鮮やかな黄色だが  
 食べられるキノコ

## ※ 参加者からいただいたおたより

今回は、茶臼岳に登れなくてとても残念でした。でも、沼原に行けてよかったです。いろいろな植物や昆虫などを見て、とても勉強になりました。

山口さんが奈良に帰ってしまうなんて、とても残念です。

茶臼岳のロープウェイが空いていたら、また行きたいです。

(北小4年・小川知峻)

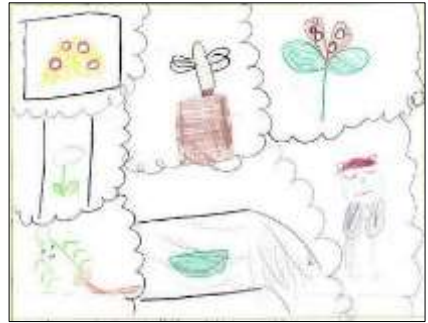
わたしがもっとがんばりたいこと

わたしががんばりたいことは2つあります。

1つめは、しぜんをもっとかんさつすることです。わたしは、ただあるいているだけだったと思うので、つぎからは、もっとかんさつしたいです。

2つめは、虫をさわられるようになることです。わたしは、いろんな虫がさわられません(コオロギ、バッタなど)。だから、つぎには、虫をさわられるようにしたいです。

(北小2年・小川裕月・絵も)



### 山口さんの自然講座

#### 秋の沼原湿原の植物

関東地方の高い山は、地形により湿地帯が多い。関西には少なく、規模も小さいものが多い。

沼原湿原の目ぼしい樹木としては、ダケカンバ、マユミ、コマユミ(実)、ツリバナ、サワフタギ(実)、カラマツ、タカネザクラ、カンボク、オオカメノキ(実)、エンジュなどがあつた(ここで言う(実)とは、きれいに熟していたもの)。花をつけていた草本植物はサワギキョウ、ノコギリソウ、ノ



ハラアザミ、ナンタイブシ、アケボノソウが印象的だった。

沼原湿原や戦場ヶ原など標高の高い所は、同じ温帯(四季がある地帯)でも、下界とでは植物相はかなり違う。それで、冷温帯と言う学者もいる。冷温帯には、フサザクラやヤマグルマの他、タムシバ、ホオノキなどの原始的な植物が多い。モクレンの仲間は花が大きく、いかにも進化した植物のように思われがちだが、その逆で、花の構造も原始的なものである。

花が咲く植物が誕生したのは、大型恐竜が栄えていた時代である。その頃の植物は裸子植物(針葉樹類で、すべて木本植物)で、種子がむき出しなので、ノーパンと言うのがぴったり。

これらの樹木は導管を持たない。導管とは、根から吸い上げた水分や養分を葉の先まで送る管である。進化を遂げた被子植物(サクランボなど種子が果肉に包まれている)は導管を発達させた。裸子植物は仮の導管の仮導管しかない。マツやスギの枝は折ってもすぐには枯れない。導管と仮導管の効率は、それほど違うのである。原始的な被子植物も導管がなく、「無導管被子植物」といい、これが原始的たる所以である。(山口龍治)

## ☪ こんな虫見つけました ☪



↑ マイマイカブリ、生前の姿…

「阿部先生、この虫、何ですか〜？」  
ある日、石川晴樹君が店に持ってきた昆虫の死骸。  
「ああ、これはね、マイマイカブリ、カタツムリを食べるんだよお。」

殻に入り込んで貪り食う様子が、マイマイ(カタツムリ)の殻をかぶっているように見えるところからついた名前。実際は肉をとかず液を出して、汁をすすっているんですって。

この虫は他にも、尻尾の先(腹部末端)からメタアクリル酸とかエタアクリル酸という物質の含まれた刺激臭のある体液を出します。皮膚に触れるとピリピリと痛み、目に入ると激痛とか。後方だけでなく上方にも噴射するので、生きているものは一応毒虫として要注意です。

奥日光・秋のハイキング～社山～

青い空

誰かがいった　きっとその青い空に　指をだせば  
指先は　真蒼に　染まるだろうと  
そら　さあ　あなたの  
白いシャツだって　染まるでしょう  
僕は　その中にある岳を　一人みつめる  
そして　描く夢も　みんな――。



芳野満彦著『山靴の音』(昭和34年10月10日・朋文堂発行)より

社山という山名の由来について書かれた文献は今のところ見当たらないが、麓に神社があるとか、山頂に社(やしろ)がある、というのは普通のことなので、それが山名になるとは思えない。それよりもこの語源は山の形によるものではないだろうか。社山は中禅寺湖北岸から望むと端正な屋根形をした山である。その形をやしろ、ほこらに見立てた山名ではないだろうか。

青い空に指をだすようにそびえる美しい山です。

日　時：11月3日(日) AM5:30 北小西門集合(解散はPM5:00頃)

(雨天中止)

行　程：鹿沼——土沢——(日光宇都宮道路)——清滝——立木観音  
……(60分)……阿世瀧……(20分)……阿世瀧峠……(90分)  
……社山……(50分)……阿世瀧峠……(20分)……阿世瀧  
……(60分)……立木観音——清滝——(日光宇都宮道路)——  
土沢——鹿沼

服　装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、手袋(軍手)、  
軽登山靴または運動靴

持　ち　物：リュックサック、水筒(ポット)、レジャーシート、雨具、  
お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、お弁当、おやつ

あると便利なもの：双眼鏡、ルーペ、カメラ、図鑑、

1/25,000 地形図は「中禅寺湖」



会 費：おとな 500 円、子ども 250 円

今年度初参加の方は年間保険料 800 円（3 月まで有効）。

問 合 せ：自然観察クラブ 阿部（電話 090-1884-3774）

※ 10 月 20 日に予定していましたが、雨天のため延期での催行です。

## ☞ 読者からいただいたおたより ☞

「鹿沼の自然・栃木の旅」 すばらしい！

小冊子ながら、大自然の重さをずっしりと感じる内容でした。

自然と向き合うよろこびに溢れていて、見ている筈のもの、今まで見えなかったもの、全く関心をもたなかった世界を生き生きと輝きをもって見せて下さる、そして心で感じさせてくれる。それは、この小冊子に収められた皆々様の豊かなお人柄そのものだ、と思いました。

こんな豊かな世界に誘<sup>いさな</sup>って下さった事、お礼申し上げます。

そのうち図書館に行って、私なりの楽しみを広げてみようかな？と、宝物を捜しに行くようなトキメキを覚えますが、雑事に紛れてそれきりにならないように、新鮮な気持のままで行ってみようと、今、思っています。

ありがとうございました。

（おじいさんを想いつつ）（宇都宮市・川俣久美子）

小誌に幾度かお便りをお寄せくださっている櫻井節子さんには、今年 101 歳になるお姉様がいらっしゃるそうです。その娘さん（すなわち櫻井さんには姪御さん）である川俣さんと共にお姉様を見舞いに行く道すがら、櫻井さんと川俣さんは、櫻井姉妹の父上（すなわち川俣さんのお祖父様）について思い出を語り合ううち、その風貌が牧野富太郎そのものだったと意気投合。それで牧野富太郎を特集した小誌のことが話題になり、川俣さんに小誌をご覧いただいて、この投稿をいただくことになったという経緯です。

☞ 本号の内容 ☜

表紙の本	牧野富太郎著『随筆草木志』より	2
	人物紹介	4
活動報告	那須・茶臼岳ハイキング 転じて沼原湿原	10
こんな虫見つけました	マイマイカブリ	13
次回案内	奥日光・秋のハイキング～社山～	14
読者からいただいたおたより		15

### 会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。  
また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭に置いてあります。(無料)  
確実な入手をご希望の方は、年会費(1,200円)をお納めいただければ、  
ご自宅まで郵送いたします。



### 鹿沼の自然・栃木の旅 月報第17号

2013年10月1日発行  
北光・自然観察クラブ  
鹿沼市戸張町1818  
(クリーニングハウスあべ内)  
発行人 阿部 良司  
年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

